

「愛は多くの罪を覆います」

ペテロの手紙第一 4 : 8

January.9.2022

ペテロの手紙第一 4 : 8 (パウロ)

Preface

今日も先週に引き続き、主題聖句について、特に今日は、第一ペテロ 4 : 8 の「愛は多くの罪をおおうからです」という御言葉について考えていきたいと思っています。

ここで言う、「罪をおおう」とは、罪や犯罪を隠蔽するとか隠すということではないということは、この聖句が醸し出す雰囲気から感じ取ることが出来ます。その雰囲気を作り出している張本人は、「愛」という言葉です。

一見しますと、「愛」という言葉は、罪や犯罪という言葉にそぐわないように感じますが、「愛」こそ罪に必要な恵みです。

人と人同士の中で罪を語りますと、正しい人が正しくない人の罪を指摘し、暴き、暴露し、晒すことが正義のように思われますが、
神の前にあって罪を語るとなりますと、暴くも、晒すもなく、すべての罪が神の前に明らかです。
私たち一人残らず、すべての人の罪が神の前には明らかですね。

Part One

私たちの社会には、罪なのか、罪ではないのかを決める境界線じみた規定や規律や法律がありますが、その社会が定めた規定や法律のみで罪を定めようとする曖昧さや不確かさ、不条理さを私自身考える中で一助となった本がありました。

3年程前に出版された本なのですが、「ケーキを切れない非行少年たち」という本です。ご存知の方もいらっしゃると思います。

児童精神科医の方が、非行少年と言われる子供たちと出会う中で、「反省以前の子供たち」とこの本の中では表現していますが、物事に対する認知力が弱く、ケーキを等分に切ることも出来ない子供たちが沢山いるという事実気付くんです。

つまり彼らは、好き好んで犯罪と言われる行為をしたわけではなく、利用されたり、騙されたり、または同じようなことをやっている人たちが他にもたくさんいるにも関わらず、その人たちのようにバレないようにやり過ごすことが出来なかったり、もしくは大人たちの理解不足ゆえに、認知力が低いという根本的な

問題はきれいさっぱり見過ごされながら、形式上の服役を強いられ、反省ばかりを迫られて、根本的な問題の解決や理解を得られることもなく、レッテルを張られてしまっていることが多々あるということです。

私は、この本の内容から教えられる霊的眞実があるように感じました。

人間が作った枠組みの中で罪あり罪なしだというのは、本当のところ、かなり不確かで、不条理で、不明確で、バレたバレないということで罪に定められたり、定められなかったりという面が大いにあるということです。

事実私たちの多くは清楚ぶりながら何食わぬ顔しながら社会を生きていますが、この人間社会には、社会の汚点や汚れを担わされている人々がいるからこそ、私たちを含めた多くの人々が外聞を装うことが出来ているというのが、世の理だということです。

そういった世の根幹的な罪（問題）についてはなかなか眼が行くこともなく、「自分とは一切関係もないことだ」と我が事として認めることも出来ず、でも実のところ社会の汚点や汚れの根源は私たちの内にあり、作り出しており、その汚点や汚れを意識できないところで誰かに担わしているということにも気付かずに、素知らぬ顔して生きている厚顔無恥な罪人であるということを、この本を通して改めて教えられました。

聖書が私たちに教える罪は、人の前にあってという不確かで、不明確な罪ではなく、すべてをご存知の唯一の神様の前にあっての確かで、明確な罪ということです。

そのため、もし私たちが、私たち自身の人生を上手に上手い具合に立ち回り、人の前にあってその罪を暴かれることがなかったとしても、いずれ神の前に立った時、その犯した罪や行いによって、すべての人が裁かれると聖書に書かれています。

そこで問題になるのが、神の裁きの前に立って、堂々と胸を張れる人なんか一人もおらず、皆が皆罪ありで、燃えるゲヘナに投げ込まれるしかないのが、私たちの人となります。

Part Two

この罪という悪や悪行を考えた時、私たちが主イエス様に会う前と出会った後とは明らかに変えられることがあります。

主イエス様に会う前は、罪という悪や悪行を考えた時、その罪という円の中に自分を含めることはなく、その円の外から、罪という円の中にいる人々の罪を指摘し、暴き、裁く側になっていましたが、

主イエス様が私の罪のために十字架に架かって死なれたということが、聖霊

のお働きによって（聖霊に触れられて）感謝と涙のうちに分かってしまうと、円の外には居られず、自分自身をその円の中に自ら進んで入れるようになります。

もっと言いますと、円の外にいますと思っていること自体が罪そのものであり、天地万物をお造りになった唯一の父なる神様の前にあつては、人を隔てる罪の円もへったくれも無く、私たち皆が皆、自分自身が罪人であるということが分かっています。

さらに言いますと、あの人の罪は私の罪とは関係ないのではなく、あの人の罪にも、実のところ大いに直接的に間接的に関わっており、ただただどんな時も人のせいにしたいと思うこの罪深い性質ゆえに、「自分はあの人とは違う。あの人の罪はあの人の問題で、私の問題ではないし、あの人の問題は私は出来ているし、私とは何の関りもない」と思ってしまうのですが、

実のところ、世に溢れる罪の根本が自分の内にあるということにまで悟らされていきます。

旧約聖書のネヘミヤ記のネヘミヤは、正に、このことを悟らされ祈っていました。

今日はちょっと時間の都合上、ネヘミヤ記は開きませんが、家に帰ってぜひ見てみてください。

ネヘミヤは、自分の父の世代や先祖たちが犯した罪に対して、「あの愚かな先祖たちが犯した罪は私とは関係ない」とは思わず、「私の父たちや私の民族が犯した罪は私の罪であり、私自身の罪でもあり、私のうちに同じ罪の性質があります」と告白しながら、「彼らの罪」とは言わず、「私たちの罪」、さらには70年以上前、さらに数百年前に犯した先祖の罪を「私もその罪を彼らと一緒に犯しました」と祈ります。

物理的に先祖たちと一緒に居たわけでもないのに、ネヘミヤは、「私も、私がその罪を犯しました」と言うんです。

英語の聖書では「including myself」となっていて、自分自身をその罪の中に含めるんです。

なぜなのか？

私たち罪人は、神の前にあつて、誰も、誰一人として、罪がないと堂々と胸を張ることなんか出来ないということを神様の恵みと哀れみと慈しみの前に、深く深く霊的に悟らされたからです。

言葉を換えますと、ネヘミヤは、人格的に、神様に主イエス様にまことに出会っているという証でもあります。

元旦礼拝から何度も言っていますが、正に、「私が死に、キリストが私のうちに生きておられる」ということを身に染みて分かっていたからこそ、罪のうちに

自分が死んでいることを認められるわけです。

そしてあの人の罪の罪が、我が内にもあると思えるわけです。

神の前にあって罪人であるということを悟らされたキリスト者の罪に対する姿勢は、指摘し、暴き、暴露し、晒し、裁くことではなく、罪人であるという共感です。

同じ罪人であるという痛みです。

同じ罪人として、神様から、何をもってしても、どんな風にも到底説明のつかない神の恵みと慈しみと哀れみと赦しを受けた者同士でしかないという愛を感謝のうちに痛感するわけです。

だから第一ペテロ 4 : 8 の言葉、

何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。(パウロ)

という言葉が出てくるんですね。

Part Three

「愛は多くの罪をおおう」の「おおう」という言葉は、創世記 9 章の大洪水の後、農夫として暮らしていたノアの話に由来する言葉でもあります。

ノアがお酒に酔いつぶれて（ここでの酔うという言葉は習慣的な飲酒を意味する言葉ですが）、天幕の中で酔っぱらって素っ裸になっていた時、息子たち二人がみつともない姿、恥を晒してしまっているお父さんに対して、お父さんの恥を見ないように後ろ向きに歩いて行って、お父さんの下半身を「おおって」あげたことに由来する言葉です。

神の救いに与り、聖書に「正しい人」と記されているノアも、当然のように罪のない完璧な人ではなく、私たちと何ら変わらない一罪人でありました。

「大酒を飲んではならない」という神の言葉に反する罪、羞恥を晒してしまうしかない罪人ですが、その罪を覆ってもらったのがノアです。

一番近い神の家族の二人の息子たちの愛なる配慮に、その罪を、恥を覆ってもらったのがノアです。

ノアは正しいから正しい人ではなくて、その罪を神様が用意してくださった箱船に覆われて救いに与ったから正しいと、神様の一方的な恵みゆえの宣言を受けただけでなく、

また同時に、神の家族の愛の配慮で、その罪を、その恥を覆ってもらったのがノアです。

ここに救いがあり、愛があります。

神の救い、またそれゆえに人を愛するという聖書的概念がここから出てくるわけですね。

私たちキリスト者は、罪という羞恥なところにいたことさえも知らずに、ノアのように恥の中で酔っていた者たちですが、イエス様の服の裾によって、その恥を覆っていただくという愛に与った者です。

だから、救いを得た民として、恵みを頂いた民として、愛に与った民として、自らが経験した恵みと慈しみと哀れみと赦しという愛をもって、他者の恥を覆ってあげたくなっていきます。

神様が私たちに望んでおられることは、同じ罪人であるという痛みを共感し、同じ罪人として、神様から、何をもってしても、どんな風にも到底説明のつかない神の恵みと慈しみと哀れみと赦しを受けた者同士の愛の行き交いです。

「神様、私はこのように救いを得ましたよね」という告白と経験が、互いに愛し合う理由になるわけです。

Part Four

愛は、私たちの内側から自動的に出てくるものではありません。

誰も神の前にあって胸を張ってはいられない罪人であり、今も変わらず神様に哀れまれているということを覚えるところから、出てくるものです。

このことをもっと良く理解するために、マタイの福音書にあるイエス様の例え話を見てみたいと思います。

マタイの福音書 18 : 21 - 35 (パワポ)

弟子のペテロがイエス様に、「私には、私に罪を犯した人に対して七回も許せる度量があります」と言わんばかりの自慢げな質問を投げかけました。

するとイエス様は、「七回どころか、七の七十倍赦しなさい」とペテロの質問に応答しながら、「あなたは、あなた自身の度量のなさばかりか、何をもってしても、どんな風にも到底説明のつかない神の恵みと慈しみと哀れみと赦しを受けた者であることが分かっていません」と教え諭すために、到底返済することの出来ない負債を負った人の例え話をされました。

この例え話に出てくる王が、唯一の神様のことを表わし、多額の負債を負った人は、私たち罪人のことを表わしていることはすぐに分かります。

で、この例え話をよーく見てみますと、ここまで私が話してきた内容がすべて含まれていることが見えてきます。

まず、この王は、「自分の家来たちと清算したいと思った」とありますが、これは、人はやがて神の前に立った時、自分の行いに従ってその罪を清算しなければならない時が来ることを指している言葉ですね。

でもここで問題なのは、二進も三進も行かないほどの借金のような罪が、神様の前にあってあるということです。

一万タラントという金額を日当1万円で考えますと、6000億円ですが、正直、よく分からない、ピンと来ない程の額です。

正直よく分からない、ピンと来ない程の額をこの例え話でイエス様が提示している理由は、私たち誰一人として自分たちが、人の前で、被造物の前で、神様の前で犯してきた罪の膨大さや莫大さを認識することも出来なければ、知ること出来なければ、どんなに言われてもピンとこないあまりにも罪深いものであるということを示唆しているわけです。

でも、そんな家来に対して、主君は「かわいそうに思って彼を赦し、そのピンと来ない程の額を免除して」あげました。

このこともあまりにもさらりと書いてありますが、一人6000億円の負債の免除が、国家予算に何の影響も与えないとは考えにくいですね。

しかも当然ながら、この人一人だけではなく、他にもこのようなピンと来ないほどの借金をしている家来たちがいたら、まさに、王の首が飛ぶほどの決断です。ある意味、王自身の去就、命を懸けた決断ですね。

これもまた、神ご自身が、いのちを懸けて十字架に架かれたということを示唆しているわけです。

そして、赦免された家来が、今度王から期待されていることは、その赦免の、免除の恵みと慈しみと哀れみと赦しの愛を実生活で体現することでしたが、

体現するどころか、ピンと来ないほどの額を免除してもらったという王の愛を受けたにもかかわらず、100デナリ、これまた日当1万円としますと100万円の負債を負っている者の首まで締めながら、「借金返せ！」と恩知らずな態度を取ります。

この王は、直接的なビジネスの利益以上に、国民同士愛を施し合うということが利益を超えた益をもたらすということをよく分かっていた王でもありました。

でも、この家来は違いました。

総合的な包括的な統合的な益よりも、目の前の小さな利益のために、最も大切

にしなければならないものを平気で犠牲にするような靈的に雲がかっている人でした。

もちろん、100万円という額も少ない額ではありません。

むしろ、6000億円よりもはるかに現実的で、すぐにピンと来る大金です。

ここが私たち罪人の落とし穴ですね。

ピンと来る少額の大金のために、ピンと来ないほどの多額の大金の恵みを捨て去ってしまうわけです。

エペソ書を見ていく中で何度も見ましたが、「キリスト・イエスにあつて天上にあるすべての靈的祝福をもって私たちを祝福してくださった」という事実が、私たちよく分かっていない、ピンと来ていないので、パウロは、「あなたがたの目がはっきり見えるようになって、神がお与えくださった望みと受け継ぐものがどれほど富んでいるのか、偉大なものであるのかを知ることが出来るように、知恵と啓示の御霊を与えてくださるよう祈っています」と言います。

受けたあわれみがよく分からない、そして、一度受けた赦免という恵みを過去のものにしてしまい、今生きる人生の現場で、その恵みを活かすことを忘れてしまっている、信仰と現実が違うと、信仰生活と経済生活は違うと、聖書の世界とこの世の世界とは通じないと、愛を知ることと愛の実践とは別物だと、イエス様が教える真理は世の常識に通じるものではないと、

何をもってしても、どんな風にも到底説明のつかない神の恵みと慈しみと哀れみと赦しという愛を、宗教活動、宗教的境地、または日曜日にたった1回1時間の礼拝に出席する枠組みに押しやって、二つの天秤を持って生きている姿を、私たち自身の姿を、正直に、この例え話は、真っすぐに赤裸々に教えてくれます。

それでもまだ、今このように言われても、ピンと来ないのが私たちです。

そんな私たちの姿が、この言葉に集約されています。

マタイの福音書18：33（パワポ）

「イエス様の寛大な愛に、過去に一度出会ってはい終わり！」ではなく、毎年、毎月、毎週、毎日、毎時間、毎分、毎秒、毎歩、今も変わらず、その寛大な愛ゆえに生かされており、その寛大な愛を注がれているという、負債を免除され、恥を覆われ、罪赦され、救われているという事実と恵みを覚えるんです。

ただし、ただ覚えて終わったら、何にもなりません。

もちろん覚えるだけでも、この家来よりはマシかもしれませんが、覚えた恵みを「おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではないか」というこの王の語り掛けの実践へと繋げることが求められています。

Conclusion

愛は、私たちの内から自動的に出てくるものではありません。
神の前にあって胸を張ってはいられない罪人であり、今も変わらず神様に哀れまれているということを覚えるところから出てくるものです。

愛は多くの罪を覆います。

私たち今も、ピンと来ないほどの罪を、意識することも、認識することも出来ないほどの罪を覆われるという特別な恵みに与っています。

その特別な恵みを受けた者として、愛に生きられればなあと願っています。

お祈りいたしましょう。

祝祷：ペテロの手紙第一 4：8